

Capt. L. L. Janes と熊本洋学校(4)

古 田 榮 作

これまで3回の論考により、熊本洋学校の成立とそこへのジェーンズ (Capt. Leroy Lansing Janes) の招聘の経緯、熊本洋学校の教育指針、熊本洋学校での英学教育について考察し〈以上、Capt. L. L. Janes と熊本洋学校(1)〉、熊本洋学校で行われた日本における近代学校における最初の男女共学の成立と男子生徒の男女共学に対する態度を見〈以上、Capt. L. L. Janes と熊本洋学校(2)〉、さらに熊本洋学校の名を後世に轟かせている「熊本バンド」の結成の経緯について考察した〈以上、Capt. L. L. Janes と熊本洋学校(3)〉。

本稿では、熊本洋学校で学んだ二人の女性（横井みや子と徳富初子）について、その後の生涯、特に結婚と結婚観を考察する。

Janes は熊本洋学校で学んだ二人の結婚と結婚後の生活について、次のように記述している。

二人の少女のうちで年少の者、おはつさんは、徳富の姉であるが、帝国議会の議員と結婚した。彼女は京都の御所の近くの幸福な住民で、模範的な妻であり母であり、彼女と彼女の優秀な夫がその中で活動する上層の社会圏に光彩を添える人物であった。海老名その人が、彼女たちの（熊本洋学校での……筆者注）最初の導き手（＝学習指導する先輩生徒）であったが、年長のおみやさんに、彼の級友で彼女の兄（横井時雄……筆者注）の媒酌によって疑いもなく正式の日本流のやり方で、著者だけが知っていることだが、すべての日本婦人の中で最も高貴で、最も有能で、婦人の魅力と性格において最も完全に近い人に、求婚し、結婚を勝ち得たが——この人と生涯の伴侶としなくては、彼がどんな努力をしようとも、彼の生活は墮落し、彼の将来は破滅させられ、彼自身も不幸に陥ってしまうだろうと、宣言して——学校での彼女の若き日の経験は疑いもなく深い印象を与えた。家族が増えると夫の到るところでの牧師としての職務の抑圧的な義務が干渉するようになるまでは、おみやさんは、彼女の祖国のいろいろな分野での少女を教育し激励するという、貴重で実に実りの多い年月を教育的な仕事に捧げた。この仕事で彼女は、いかなる国においても顕著に評価されるであろう、組織に対する、愛の訓練（＝道徳的訓練）に対する、また知的激励の刺激（＝kin-

dling) に対する能力を発揮した。¹⁾

熊本洋学校に学んだ二人の少女の結婚とその後の生涯を紹介するジェーンズの考察である。ここで、伝記等により二人の少女、特に湯浅初子の、結婚および結婚にまつわる思考について考察してみよう。

徳富初子は熊本県葦北郡水俣村で、代々総庄屋をつとめ、古くからの豪士で、醸造酒業を営む徳富多太助（＝一敬、淇水と号した）・久子の子として誕生した。徳富多太助・久子夫婦には既に常子、充子、音羽子の三人の娘があり、今度こそは息子の誕生をと願ったものの叶わず、諦め切れぬ思ひは、……多太助は男子たる可く全家から期待されて女に生まれた戸籍上の第五女（多太助・久子夫婦は多太助の直ぐ下の弟夫妻が娘一人を残して死んで仕舞っており、彼らは長女として育てていたのに）に“初”という名を自分で付けた。それは安政七年、一月廿三日であった。²⁾

初子の誕生後、徳富家には猪一郎（蘇峰）、健次郎（蘆花）が生まれている。初子の気性を示すエピソードが伝えられている。

初子は姉等のあとについて勇んで寺子屋行きを始めた。遊芸は嫌いであつたが、読み書きは餘程好きであつたらしい。草紙など取揃へて誰れにも催促されるでもなく、朝も早く起きて、手習に行つたものだ。然し此處でも持ち前の勝氣はグングンと現れて來た。

小さい娘は口を結んで、一心になつて清書を書いて行く。師匠はあの子とこの子と見て居つて中々初子の番に廻らない。スルト初子はあの大きな眼でデロリと師匠を覘んで居る。初子の控への小さい手帳には、黒々と其日付けの中に黒點が押して有る。姉等が不思議がつて何かと尋ねると初子は笑ひもせずに返事をする。

“今日は師匠黒星だ。よく教へて呉へぬから”³⁾

氣の強い初子の一面がよく描き出されているエピソードである。少人数の寺子屋教育の一面を示すとともに、向学心の強い子として育っていたのであった。

十二歳の時、父の多太助の熊本藩出仕に伴って、一家は熊本に移り住むことになった。母は一先ず初子を當時熊本城下に移り住んで居た小楠の未亡人、この横井家に預けることにした。横井家には、息子、娘、二人の子供が在つた。長男は時雄と云つて殿様のやうに上品な、小楠の息子としては少し鹽が不足らしいが、然し學才ともに秀いでた少年であつた。妹はみや子と云つて切角なら兄と入れ代へ度いと云ふ容姿の持主。然し、敏捷で、快活な才媛である。……この一家が今は沼山津を引き上げて熊本城下の濠端に住んで居たので、初子は暫く預けられる事になつた。みや子と初子の交りは、この時から既に始められたのだ。⁴⁾

熊本洋学校が創立され、その「紳士養成」の教育が緒につくや次のようなことが生じたのである。「このゼンスの學校の評判は、縣下の隅から隅までひゞき渡つた。兄等が寄

れば觸れれば一種の誇を以つて話し會ふこの學校が、未だ奥深く閉ぢ込められて居る娘等にも耳に入らない事はない。殊に凡てに魁する横井家の傳統の中に、已に兄の時雄は、この選抜隊の中に入つて、押しも押されもせぬ一人となつてやつて居る時だ。氣性では兄をも凌ぐみや子が母に願ふ處はやはりこのゼンスの下に學び度いと云ふ事だ。同じ好學の精神に燃えて居る初子、負けじ魂の化身の初子が、共に居つて、二人の娘はこの機會を失ふ筈がない。女に學問？と云ふ上に女に英語？は更に問題となる時代ではあるが到當親等も種種工風して、ゼンスの妻君に頼んで娘等の好學の精神を満足さして貰ふ事となつた。⁵⁾」

こうして初子とみや子の二人は、開化のための教育をジェーンズ夫人（ジェーンズの二度目の細君で、スカッター博士の令嬢）から受ける事となつたのであり、ジェーンズ夫人の下に學習にやってくる娘等の数は十指にも達していた。そうした中で「花岡山事件」が勃発し、初子とみや子の「共学事件」が引き起こされるのである。

當時初子等は、ゼンス夫人の都合から教授が續られないので、已に十名にもなつて居た、女生徒等の中で他の娘等は、一時思い切つて學業をやめて居たが、みや子と初子の二人だけは座席もない廊下に、男生徒等の教室の外で、一處に教授を受けて居た。冬の最中、お濠から吹き上げる寒風で、手足も凍ふる中を、二人は決してあとへ引かなかつた。男生徒等は、初めは少しも氣にもせなかつたであらうが、度重なるにつれて、うるさくもあり、氣の毒にもなつたのであらう。或日彼等はゼンスに使者を立て、抗議を申し込んだ。この時のゼンスの答へが面白い。逸早く、それと感附いた、ゼンスは使者に口上の半分も云はせぬ内にヂツト青年の瞳を見据えて逆問した。

“君等の母上は女か男か”と。

男生徒の抗議は、これで終つて、この二人は最後まで、廊下の聽講を繼續した。⁶⁾

このように向學心の強い初子とみや子の二人はその後どのような生涯を送つたのであろうか。殊に二人がどのようにして結婚を決意し、どのように伴侶と共にその後の人生を歩んだかを垣間見てみよう。

みや子は牧師夫人として終生を送つたし、初子には其終生の最も強き動氣の一つは信仰であつた。初子が終生どんな難關に處しても、唯一度も愚痴や不幸を人に洩した事のない、驚く可き潜勢力は、彼女の性格の強さによるであらうが、彼女が少女時代に、魂の根柢に打ち込まれた、然かもゼンス夫妻から直接に打ち込まれた、基督教の素養による事⁷⁾は否む事の出來ぬ事實である。

「花岡山事件」と「共学事件」が勃発した年にジェーンズは任期満了で帰国し、他方洋学校は閉鎖のやむなきに到つた。洋学校で學んだ生徒たちはその多数が上京・上洛し、新しい學び舎を求めることになる。

初子は猪一郎とともに東上し、福澤諭吉の「慶應義塾」の予科に通ひ始めるが、猪一

郎は進学先を決めかねており、東京英学校に入学するも、満足を得なかつた猪一郎は、同志社と新島の下へ、投じて行つた。初子自身も京都に向かい、また横井時雄の下に托されていた末弟の健次郎蘆花も、後に上洛し、同志社で学ぶことになった。初子は母親役として三人分の学資金のやりくりを任されていた。卒業を目前とした猪一郎蘇峰は、校長の新島襄に謀反気を起こし、京都を飛び出してしまふ。再度上京し、叔父江口高廉の『内外交際新誌』の編集を手伝うとともに岡松甕谷の紹成書院で学んでいたが、郷に帰って、新奇薪直しに、勉強せん乎と考え、熊本に引き上げていった。

帰熊した猪一郎蘇峰は父多太助一敬ら横井実学党が1879年11月に熊本に「修身成徳」⁸⁾を目的として設立した「共立学舎」で教鞭を執り、更に1882年3月には三派鼎立する熊本での自由民権運動・民権思想の学習学校、民権私塾として呱呱の声を上げた「大江義塾」⁹⁾を主宰することになる。徳富初子は、父母を助け、弟猪一郎の内助者として働いた。……この頃姉等は皆縁付いて、母久子の病身の處から、自と一家の仕事が初子の上に廻¹⁰⁾つて來た。

「世間並の結婚と云ふ事は頭に來ない。出来る事なれば自身も今日の女性として一新進路を拓き度いと云ふ心は充分にある。……病身の母を見ては、醫學の研究もやつて見渡し、又幼児の全く省みられぬ忙しい家庭を見ては、當時始めて耳にする幼稚園といふもの、必要も深く思はれる。いづれにしても、このまゝで熊本に埋めることは出来ない。さりとて、父母にこの上更に學資を仰ぐことは出来ない。況して家では已に殆んど弟の代となりつゝ、在るではないか。終ひに彼女は志を決して、東京なる矢島楫子を尋ねる可く決心した。」¹¹⁾時に、1883年、初子の叔母「楫子は櫻井女學校々長として、當時都下に隠れなき學校の一つに納なつて居る時である。凡ての事業は、看護婦養成に至るまで、この學校の經營の下に為されて居た時代である。」¹²⁾「當時の櫻井女學校は、この東西の人物(= ツル一夫人と矢島楫子)の強い提携を基礎として築き上げられつゝあつた。女學校は豫備として小學校を備へ、更に幼稚園の必要を感じた。學費少き生徒の獨立自給の道を供して、一方には看護婦養成所も開かれた。たゞそれ計りではない、日曜日には各教會に日曜學校教師を提供し、又各名家の夫人等に、英語修得の機會をも供して居た。」¹³⁾「兎に角當時の初子は幼児の養育を主として、我國に今や始めて試みられつゝあつた幼稚園事業をもつて立つ可く自ら用意しつゝあつたやうだ。」¹⁴⁾

このように初子は叔母楫子の下で、自立すべく幼児教育を学び、幼稚園經營の實際を学んでいたのである。

酒乱の夫と離婚した上で、上京して築地の小學校教員伝習所を抜群の成績で卒え、最初の小學校訓導試験に合格した、矢島楫子は、十歳も年下の兄直方の書生鈴木要介との間になさぬ仲の子をなしていた。兄直方からの書簡によれば、彼女の離縁した夫との間の子、林治定は花岡山の盟約に加わり、キリスト信徒としての誓いをしていた。

1878年の秋のことであった。安川亨牧師が矢島楫子の下宿を訪ねた。要件は新栄女学校への招聘であった。我が子林治定のこと、勤務する桜川小学校の受け持ちの子である元山ハルの「身売り」のこと、……が頭の中をかけめぐる。酒害は彼女の離婚の原因でもあった。失明の危機を乗り越えてきた楫子であった。酒の害を訴えるには、女学校という場は最適の場ではないかと楫子は考え、ミセス・ツルー (Mary T. True) の居宅を訪ねる決意をした。

ミッション・スクールとしての新栄女学校の校長の要件として、ミセス・ツルーは、

一、日本婦人であること

一、キリスト者であること

一、教養のある人物であること¹⁵⁾

を心に描いていた。ところが、楫子は就任の条件として

一、自分は食事の世話はしないこと

一、学科については精々やってみること

一、寄宿舎の世話は承知のこと

一、月俸は目下10円であるからそれでよいこと¹⁶⁾

を上げた。ミセス・ツルーの考えでは月給はやや高いと感じたものの自らの条件の第二は充たされないものの信頼して教育を委託できる人物として楫子を校長として迎えることになる。校長代理として新栄女学校に迎えられた楫子はプロテスタントにとって許されぬ習慣を身につけていた。喫煙の習慣である。訪問客と歓談し、煙管の首を煙草盆に置いたまま見送りに出向く間に、校長室に煙が充満するという小火さわぎが起こった。事の顛末をミセス・ツルーに報告し、謝罪して「今後二度と煙草をのみません。」と誓うと、ミセス・ツルーは「今日の小火騒ぎは、神様の大きなお恵みです¹⁷⁾ね。」

この小火騒ぎ以降、楫子の脳裏から「神様の大きなお恵み」というミセス・ツルーの言葉が離れず、何等のとがめもしない彼女の態度が眼を離れなかった。朝夕聖書を読むようになり、時間を見つけては教会での説教を聞くようになった。ある日曜日の教会の説教の論題は「姦淫の女とイエスのまなざし」であった。それはヨハネ伝第8章の姦淫の女に題材を取った説教であった。イエスの「汝らのうち、罪なき者まず石を擲て」の言葉を聞いて、姦淫した女を連れ立てて来た学者、パリサイ人は良心に責められ、その場を立ち去っていった。姦淫女と二人きりになってから、イエスは「女よ、汝を訴えた者どもはいずこにおるぞ、汝を罪する者なきか。」と問い、女の「主よ、誰もなし。」の言にイエスは「我も汝を罪せじ。往け、こののちふたたび罪を犯すな。」と諭した。この説教での「汝らのうち、罪なき者まず石を擲て」の言葉にふれ、『人間には審く資格がない。罪のない者だけがその資格があるのだ』と納得し、その後二ヶ月も経ずして楫子は洗礼を受けた。¹⁸⁾

不倫の子をなし、不注意から小火騒ぎを起こし、なお教育事業に専念しようとする楫子と起居を共にしようとした初子である。自立しようとする一人の女性として何かに打ち込むことを学ぼうとしたことは否めないであろう。そうした楫子に伴われて伝道活動に同行した初子であった。楫子は伝道活動で安中を訪れる事も時々あった。楫子は安中に寄れば必ず味噌醤油問屋の有田屋に泊った。安中の有田屋の母堂もよ子も若主人の治郎も既に洗礼を受けていた。

初子の縁談は、決して楽なものではなかった。固より國から出て来た目的が、出来る事なら獨立の生活に入り度い考へである。それで自身求めて縁談などを考へる筈はなし又他處から無理にこれを勧める人もない。唯絶えず忘れないのは父母と兄弟である。特に弟の猪一郎である。彼は音羽子に誇を感じて居た以上この姉には誇を感じて居らしい。幼い時からこの二人は負け嫌の雙方男女の旗頭として育つて來た。熊本にも一緒に出た。東京にも前後して出て來て居る。猪一郎が歸れば初子も歸つて大江義塾を助けて居る。彼等の生活は何時の時代もこの時まで、最も近く暮らされた。共にゼンスの弟子であり、共に同志社に學んで居る。一緒にキリスト教も信じて居る。凡べて共通點が多い。多くの女性を見渡しても當時初子程の婦人は餘り多く見なかつたに違ひない。彼れは弟としてやはり、姉の良縁を心懸けた。初子自身も一切身姿などに無頓着ではあつたやうだが、年頃の若さと健康、それに自然に備はる容姿には、一種の氣品を備へた。今日の言葉で云へば印象的な顔であつたから當時あちこちの耳目を引いた事は争はれない。別に求める譯ではないが、求婚者も少なくなかつた。弟を通して申込むものもあつた。然し初子は殆どいづれにも耳を傾けなかつたやうだ。唯一度初子自身出向いて行つて直接談判をしたのであつた。それは弟も將來を嘱して紹介した人物であつたらしい。先方は其時も早や相當な政治家であつた。初子は何處で面會を求めたか知らないが、冒頭第一中心問題につき入つた。

“貴兄の一夫一婦觀は”

この生眞面目な顔で、ニツコリともせず出し抜けに尋ねられては、大抵の男も參るであろう。然し先方もさるもので、平氣な調子で徐ろに答へた。

“一夫一婦、ハア、私も今こそこうして居るが、いづれ一と角になれば女の一人や二人は相手にするであらう。一夫一婦などと云う事は、今から約束できない”

“それでは、このお話はこれ切りです”

と初子は二の句をつがせず直ぐ暇を告げて歸つて來た。……ゼンスの教育と云ひ、新島と云ひ、キリスト教の鋭い男女の貞操觀を根本的に、信じて居る初子には、假にも、さうしたルーズな事は考へられない。人物本位、むしろ腕前本位で弟は紹介したかも知れぬが初子には全く落第であつた。此時の事であらう、楫子女史はよく語つた。

“お初さんがあの時、歸つて來て、憤つて憤つて、あんな人間を紹介するなどと云ふ

事が在るものか、といひながら、私の室に在つたお盆の上のおせんべいを、ばりばり殆んど皆食べて仕舞つた”

と云つて其時の様子を思ひ出すやうに笑はれた事があつた。¹⁹⁾

この逸話の初子への縁談の相手方の政治家は犬養毅である。

地位、財産、名望などは問題でない。眞實²⁰⁾敲いて偽のない、正味正當の人物をと、初子は結婚するならば選ぶ覺悟であつた。

こうした中に持ち上がったのが有田屋の主人湯浅治郎との縁談である。先妻に先立たれ乳児のろくを含め4人の子どもの父親(4男2女であるが、三男四郎四男五郎は天)との縁談である。湯浅は味噌醬油の醸造販売の有田屋の総領息子として、1850(嘉永3)年父治郎吉、母もよ子(茂世とも記される)の間に生まれた。治郎の父治郎吉は婿養子であり、味噌醬油の醸造販売ばかりでなく、田畑を買い、養蚕をして身代を築き上げた。治郎は、15歳で元服して家業を継ぎ、17歳で原市の眞下茂登子と結婚している。彼は家業の味噌醬油の醸造販売ばかりでなく、横浜港に出向き南京米や魚油等の輸入販売をし、農学家津田仙の新説による稲作改良を推進し、肥料の卸売りも手掛けた。1872(明治5)年「便覧舎」を創設し、和漢の古書・新刊書を蒐集・購入し、無料で自由に閲覧させ、町の青年の知識を大いに啓発した。1874(明治7)年新島襄が帰朝し、安中城内の造士館で講演するや彼も米国の新知識を吸収せんとして聴講した。1878(明治11)年3月末には、「便覧舎」二階で、新島より男女30人が洗礼を受け、安中教会が創立された時、彼も妻も受洗した。学務委員を務め、生産会社同潤社を起こし、それを拡充した碓氷銀行の頭取ともなった。1880(明治13)年碓氷郡選出の県會議員となり、翌1881(明治14)年には県會議長となり、10年間その職を務めた。他方で、彼は日本鐵道會社の理事となり(1881年)、1883(明治16)年3月にはキリスト教に関する新刊圖書の出版ならびに販売を主とする「警醒社」を創立し、その経営にあたった。このような政治・經濟の多方面での活躍をしていた治郎であつた。安中教会の創立時のメンバーであり、この教会の創立時に新島は「信者は酒を飲む可からず、男女混合の湯に入る可からず、安息日に旅行す可からず、常に聖書を携帯す可²¹⁾し」と申し渡した。この新島の申し渡しを遵守していたからでもあろうし、人道的立場から彼が中心となって提唱した「廢娼運動」が初子の「一夫一婦論」の共感を得たのかも知れない。1882(明治15)年3月に彼は群馬県会において、「前議會に於いて萩原國太郎氏より貸座敷營業規則改正の建議が出て留保されて居れど、寧ろ娼妓其者を全廢するを可とす」と提案し、議員45名中43名の賛成を得て可決し、また当時の群馬県知事楫取素彦もこれを可納受理し、これに反発した貸座敷業者との膝詰め談判もあつたが、治郎は「娼妓存置の要もなく、反つて風教上有害無益だから、之が廢止を建議したのである。諸君にして有益無害と認むるならば諸君亦之を建議するは諸君の自由である。自分達の建議を取消すことは斷然出來ぬ」と言い放ち、「湯

浅を引摺り出して擲れ」との一部業者の暴言に対して治郎は「前に居る人々は陳情すると云ひ、後ろに立つ者は暴言を吐く、何れが本當の態度であるか、其れに由つて當方の考もある」と述べたという。治郎の投宿先が警察署の隣であったこともあり、抗議に訪れた貸座敷業者も解散を余儀なくされた。その結果、同年4月には群馬縣令第二十七號により、「明治二十一年六月を限り、貸座敷營業及娼妓稼一切を廢止する」と布達され²²⁾た。治郎の母もよ子は新島の弟子として洗礼も受け、安中教会の中心人物であった。旧士族の多い安中教会員には養蚕所を建設し、田畑に桑を植え、養蚕を指導したのは治郎であった。味噌醬油問屋の有田屋は、前橋・高崎・藤岡・原市の伝道者教師同行者の無料宿泊所であった。伝道者教師として派遣された矢島楫子の同行者として初子は上州に赴き安中の常宿の有田屋に宿泊した。治郎の妻茂登子が二女ろく（禄子とも記される）の出産後、病を得て不歸の人となっていた。と乳飲み子のろくの養育をしたい……女の子を始めから理想的に育て、みたい……そうした気持ちが初子の胸に去来した。もとより自立できる婦人になるために幼児教育について研鑽を積んできた初子である。連れ子の存在が障害となるのではなく、むしろ機縁となったとさえいえよう。

何事も明日に

ならばとおもうこそ

おこたるけふの

心なりけれ²³⁾

と冒頭に詠み込まれた「日記」には

夫婦共ニ外出スル時ハ、名字及ビ代名ヲ用ヒズ²⁴⁾

との記載がある。この「名字及ビ代名ヲ用ヒズ」の意味は大きい。衆人を前に「治郎さん」「初子さん」と呼び交わすことを宣言することは治郎・初子夫婦が「新しい夫婦」像を構築するために心掛けたものであったのではなかろうか。日記の記述部分の第一葉には

明治十八年十月九日、青天

上野國、安中驛、碓井會堂ニ於テ結婚式ヲ行フ²⁵⁾

とのみあるだけであり、続いて

十日 晴天

午前十時ヨリ安中教會、秋期親睦會有、之ヲ會堂ニ於テス。午後浅間ニ於て一同種々遊戲為テ午後四時頃歸ス²⁶⁾

と結婚式・披露宴についての記述がある。十一日・十二日と二人で前橋に出向き、その間に海老名夫妻と二度も往復している。多忙な治郎との新生活に向けて水入らずでのほんの一時を過ごしたのであり、十三日に治郎が県庁に出向き、十四日から十一月一日まで海老名みや子と伊香保で過ごすのである。みや子を交えた三人の伊香保での日々は

夫治郎の多忙な生活を支える妻としての準備期間であり、また4人の子の母としての準備期間でもあった。既にキリスト牧師の妻としての生活に入っている海老名みや子を交えることにより安中教会の中心的人物の妻としての充填期間でもあったであろう。キリスト者として生きることへのパイロットが海老名みや子に託されていたことは間違いなかろう。来るべき国会開設に備えながら新居を東京に移すことを決意したのもこの時期のことであったから「honey moon」とは名ばかりのあわただしい時間であった。

結婚への機縁となった乳児のろくをはじめ治郎と先妻との間の子どもと対面するのは十一月に入ってからであった。初子の日誌には、

五日、風吹、午後治郎原市ニ行、初中磯村ニアツケ置キタル小児ヲ見ル為ニユク²⁷⁾
と、あたかも治郎と初子が別行動をしたかのように記述しているが、治郎は初子を携えて子どもたちと面会に行ったのであり、初子を子どもたちの母親として面会させるために同行させたのである。可憐な小児を我が子として迎えるための行動であり、湯浅家の一員としての初子にさせるための「面会儀式」であった。

十二日、晴天、初午前九時頃櫻井女學校ニユク。午後少シ降雨、甚ダ寒シ。七時頃治郎上州ヨリ歸ル。仁以女ヲ伴ヒ來ルト雖モ、榮女ト共ナリシヨリ、日本橋久保庭宅ニ止宿ス。²⁸⁾

廿八日、晴天、治郎三郎ト共に歸宅ス。²⁹⁾

そして、十二月十二日には乳児のろくを東京赤坂の居に迎え、治郎と三人の子どもの五人と生活することになったのである。

治郎は初子と結婚後も多忙を極めた。群馬県会と議長として、家業の味噌醤油醸造販売に、銀行の頭取として、安中教会の中心人物として、また警醒社の社主として、東京と前橋・安中を往き来していた。1886(明治19)年の年末には『将来之日本』で論壇にデビューした猪一郎蘇峰が、興隆の方向に向かいつつあった大江義塾を閉じて、一家を挙げて上京してきた。猪一郎蘇峰の『将来之日本』の出版に際して経済的支援をした治郎は猪一郎蘇峰とともに1887(明治20)年には雑誌『国民之友』を創刊し、1888(明治21)年に「民友社」の設立し、主筆の蘇峰を経営面から支えた。この「民友社」は1890(明治23)年には『国民新聞』を創刊した。1886年には組合教会本部の常置委員となりその会計を担当して組合教会の運営に関与し、他方1890年に第一回衆議院議員総選挙が挙行されると治郎は立候補し、当選した。1887(明治21)年から同志社の社員に迎えられた治郎は、新島、猪一郎とともに同志社綱領を起草し、同志社の財政整理に活躍し始めていたので、東奔西走の毎日であった。代議士としての生活、家業・事業家としての繁忙、新聞社の仕事、同志社の社員としての教育への積極的関与……こうした中で次第に治郎の心は教育事業に傾き、第二回衆議院議員総選挙には立候補せず、その居も京都に移すことになる。

繁忙を極める治郎を支えつつも初子は、二つのことを手掛け始めていた。一つは独身時代から習得に努めていた幼児教育の事業であり、ろくを始め我が子の為に、また他家の子どもの為に我が家を開放して幼稚園を開始した。他は矯風会の主要メンバーとしての活動である。

自宅を開放しての幼児教育事業には子どもらが幼い心に稚い頭に理解されると否とに拘らず、其子に最上のものを與へるという教育方針で臨んでいた。³⁰⁾ 次の逸話はその点を如実に物語るものである。

禄子（二女ろくのこと）が未だ七つ八つの頃、家で幼稚園をして居た頃の事だ。何か祝い事があつて、お萩が出来た。そしてそれが幼稚園の生徒一同に配られた。其頃からよく母の手傳ひをした禄子は、其日も、各々の小皿にお萩配りをやつた。處が其日禄子はお腹を壊して居た。すんで仕舞ふと、母は何の容赦もなしに禄子に云つた。

“禄は、お腹が悪いのだから、お萩は今日はいけませんよ”

母の一言は全くの憲法である。禄子は妙な顔をして、喉の凝りを吞んで引き下がつた。³¹⁾

「彼女は又絶対に眞實である事を、自分にも亦子供にも萬遍なく求めた。」³²⁾ 日誌の裏表紙に書かれた

おこたりのかたにしあれば百年の

後の世までもとゞめおかまし³³⁾

と、言う短歌にも現れている。幼時から自制と克己を鍛えていく必要を認め、それを我が児ばかりでなく、幼稚園の通学児にも求めていたのである。

私心のない初子は情から解放され眞實を求め、貫こうとする姿勢で、各々の子どもに最上のものを与えるという教育方針で幼児教育に尽くしたのである。

他方、矯風会活動は、良俗の涵養・普及を求めるものである。通常の良俗とは異なる、西欧的な価値観に支えられた、進歩を確信し、人間の根本的平等という理念に基づくものであった。それは以下のような経過で彼女を巻き込んでいくのである。1886(明治19)年に来日した矯風會萬國派遣委員として送られたレヴィット夫人(Mary Clement Levite)の講演を機会に誕生した「東京婦人矯風會」の事業である。アメリカで南北戦争(1861~65)の直後に起こった戦争の「後遺症」ともいうべき酒害の除去の運動が発生した。「禁酒運動」であり、運動の提起者ウィラード(Frances Elizabeth Caroline Willard)は米国の各都市を巡回・講演し、各地で母親と女性の組織を設立していった。「禁酒運動」に端を発した女性の団体(=全国キリスト教婦人矯風会=National Woman's Christian Temperance Union)の国際的な組織(=世界キリスト教矯風会=World Woman's Christian Temperance Union)から派遣されたのがレヴィット夫人であった。レヴィット夫人は「万国政府への請願書」³⁴⁾を携えて東京、神戸、岡山、長崎などで矯風講演を行い、夫の大道に悩まされた矢島楫子を中心として東京婦人矯風会(Temperanceを禁

酒と解し、婦人禁酒会との意見に対し、それは矯風ではないかとして矯風会なる名称を提案したのは海老名みや子だといわれる³⁵⁾が発足した。初子、みや子、楯子は創立時の会員であり、楯子が会頭、みや子が会計に選出されていた。(海老名みや子は創立の直後に退会しているという記事が『女學雑誌』48號にみられる³⁶⁾) その規約には会の目的を次のように規定していた。

本会は社会の弊風を矯め道德を脩め飲酒喫煙を禁し以て婦人の品位を開進するを目的とす³⁷⁾

アメリカの全国キリスト教婦人矯風会は、禁酒運動に限らず、婦人参政権、道德教育、家庭生活の改善その他、広く社会問題に関してもその活動を広げて行った。世界キリスト教矯風会は、平和 (peace)、純潔 (Purity)、禁酒 (Prohibition) が家庭と国を守り、国際的な一致という目的に必要な要素であるとしていた。³⁸⁾

東京婦人矯風会の設立されたのは、1886 (明治19) 年であり、1890年を期して国会を開設するとの勅諭が出され、近く憲法が公布されるという情勢の中で、民権の確立とともに一夫一婦制度の確立、男女平等の実現を期する婦人団体として姿を現わしたのである。

初子は、矯風会の中心メンバーとして1889 (明治22) 年に元老院に建白書を提出している。この建白書には男女八百余名の署名連印があったという。その要旨が『女學雑誌』第161號) に掲載された。

○倫理の基の要旨

- 一、一夫を以て数婦に接するは自然に反す、何となれば欧州各国の (伊太利は女史の数男子よりも少き故之を除き) 人口を男女に区別するに女子の男子に超越するは僅かに百分の三、七……即三分七厘余に過ぎればなり、又欧州各国生児は男子常に多くして女子常に少なく十七歳より四十五歳まだえは男女の数平均すればなり
- 一、一夫を以て数婦に接するは人情に背く、何となれば婚姻の趣旨は男女情を尽して相愛するに外ならされはなり、情愛を他に分ちて専らならされは夫婦の関係消滅すればなり、有妻の男子他の婦人に接するは姦淫なればなり、有夫の女子他の男女に情を分つを以て人情に背くとすれば、有妻の男子か他の婦人に接するも亦同しく人情に背くものなればなり
- 一、一男子四人の妻を有するを許されたる亜刺比亜すら近頃は一夫一婦に満足し、一夫数婦を制とするモルモン宗も米国政府より公然一夫数婦の制を取ることを厳禁せられたり
- 一、我国は女子の数却て男子より少なし則ち (明治) 十九年に於いて男子の数一千九百四十五万四千四百九十一人女子の数千九百〇五万六千六百八十六人にして男子百人に付女子九十七人余なり、斯の如く女子少なき国に於いて一夫を以て数婦に接

するは決して自然に適當するものにあらざるなり、他の日本の男子より其の配偶を奪へるものなり、日本国に於て自然に成立つべき家族を滅ぼすものなり

一、然るに我国の中上等の家には畜妾の風習甚だ熾なり畜妾より生ずる弊害は

第一 夫その妻虐遇し、一家不平となり、夫妻その居を別にするに至る

第二 人間の快樂中最も真実に優美なる家内の快樂を奪ひ去る者なり主人一人の肉欲を達する為め父母妻子の快樂を犠牲とするものなり。

第三 妾たるものはその家財を盗まんと欲し、その子を戸主となさんと欲し為めに一家を擾乱絶滅せしむるに至る。

第四 兒童の円満なる發育を妨げ、皇天に対し社会に対し大切に教育させる可らざる兒童をして偏僻不淡泊とならしむ。

第五 一家は一国の基なるを以て一家の不平擾乱一国にもその關係を及ぼすなり、又た社会の上層に位する人の一挙一動は一町一村より一国に波及するものなれば、上層の人か数婦に接するは姦淫の毒瓦斯を社会に流かすものなり。

第六 子たるものは父の爲す所を擬するを以て姦淫の惡習は後世にも伝はり及ふなり。
一、我国に於ては正妻と妾婢、正嫡と庶子との區別判然せざるか故にその弊害殊に甚たし その區別を立るは甚た必要なり、英國の如きは私生児は合法相続人たるを得ず

一、一夫数婦を救ふの第一法は基督教によるにあり、儒教は道德の活気なく且その教へ妾を卑めず、仏教は女人を以て惡人となし、仏の熱心なる信者の中若くは高僧の中には数婦を蓄ふるもの多ければ以て頼みとするに足らず、只基督教は一夫一婦を主張するものなれば必ず之によらざる可らず。

一、その第二法は法律上男子の姦通を制する之れなり、刑法第二百五十二条は左の如く改正せられんことを望む。

現行法 有夫ノ女姦通シタルモノハ五ヶ月以上二年以下ノ重禁錮ニ処ス 其ノ相ヒ姦スル者又タ相同シ

改正案 有妻ノ男子若クハ有夫ノ女他ノ男女ニ姦通シタル者ハ共ニ六ヶ月以上二年以下ノ重禁錮ニ処ス 其相姦スル者亦相同シ

又た民法若くは婚姻法の如きものに於て男女の姦通を制する為め左の箇条を設けんことを希望す。

一 姦通トハ有妻ノ男子若クハ有夫ノ女、他ノ男女ニ接シ又ハ有妻無妻ヲ問ハス有夫無夫ヲ問ハス他ノ有妻男子又ハ有夫ノ女ニ接スルヲ云フ 即チ有妻ノ男子ガ妾ヲ置キ婢ニ接シ芸娼妓ニ接スルカ如キハ皆姦通ナリトス

一 夫婦ノ中何レナリトモ姦通スル時ニ於テハ其配偶ハ之ヲ裁判所ニ告訴スルヲ得ベシ、而シテ姦通者ニ向テ相当ノ償金ヲ請求スルヲ得ベシ、然レトモソノ

償金ハ姦通者所有ノ財産ノ二分ノ一ニ超フヘカラス。

一 姦通ハ離婚ヲ請求スル正当ノ理由ト為スコトヲ得ベシ³⁹⁾

この建白運動の開始は1888(明治21)年のことであり、「矢島会頭は白装束に懷剣をふところにおさめていった。臣下の身で一夫一婦の建白書を奉ることはお上に抗議申しあげることであるから、いつ切腹を仰せつけられても直ちにお受け出来るように⁴⁰⁾」の悲壮な覚悟であったといわれる。

弟猪一郎蘇峰がお見合いの相手として紹介した犬養毅木堂に「一夫一婦制に関する所見」をただし、彼の堅持する意志のないことを知るや直ちに断った初子である。この建白の起草に当たったとしても不思議ではない。

「東京朝日新聞」は1889(明治21)年5月21日付の紙上に「倫理の基の要旨」を全文報道し、同月25日以降に「豈是れ単に柔弱なる婦人の手にのみ委すべき事ならんや」と題する社説を掲げて、この運動を取り上げた⁴¹⁾。「東京朝日新聞」の社説は、一夫一婦の実現という「人生最緊最要の問題」のためには、基督教に固執して儒教・仏教を排除するのではなく、「社会の一大勢力を造り此の一大勢力を以て此問題の実行を遂ぐべし」という、統一戦線運動の勧告であった⁴²⁾。中江篤介兆民らが発行していた「東雲新聞」は、同年6月4日号に「大阪婦人の建白」と題して、湯浅初子の署名を削除の上、「倫理の基の要旨」の全文を掲載したが、翌5日号は「正誤」と題して、「左の通申越したれば茲に正誤す」という前書に続けて

貴社新聞第四百十六号雑報欄内に大阪婦人の建白と題し御掲載相成候項中一夫数婦の弊を救ふの第一法は基督教に依るにある云々の一項は妾等同意者に於ては少し穏当を失する嫌なき能はずと存じ建白案中には記せざる筈に有之候 御掲載の主意の要点は登初東京婦人矯風会主唱者が作りたるものならんと存候 已に該会より出す建白案には右の一項は削除し有之趣き聞及び候 故に妾等は該項は初めより主意中に記載無之候に就ては乍御手数本文御掲載被下御取消之程御依頼申上候以上

明治廿二年六月四日

大阪市北区堂島裏二丁目 石田多佳

大阪市北区菅原町 松永芝香

東雲新聞社御中⁴⁴⁾

こうした反響を受けて初子等は民権論者の植木枝盛に面談し、建白書の起草を委嘱したのであろう。植木枝盛日記(稿本)の五月三十一日の記述には「湯浅初宅に過る建白書草稿を渡す⁴⁵⁾」とあり、六月二十七日に元老院に提出された建白書は植木の手により成ったものであろう。

1887(明治20)年10月に、司法省に「法律取調委員会」が発足し、ボアソナード(Gustave Émile Boissonarde) 法典の草案準備が最終段階に入っていた⁴⁶⁾。1889(明治22)年には

「法典編纂ニ関スル意見」が発表されいわゆる「民法典論争」の導火線となった。⁴⁷⁾ こうした中での「一夫一婦」制の提唱である。民権論者をも含んで幅広い反響があったことは勿論である。この「一夫一婦」制の建白は、東京婦人矯風会の組織の改編にもあらわれた。矯風会の世界共通のシンボルである、ホワイト・リボンに由来する「婦人白標倶楽部」が東京婦人矯風会の外部組織として、政治問題を扱うために創出されたし、内部組織の整備拡充がなされ、禁酒、教育、政権、慈善、衛生、風俗の六部を発足させ、初子は風俗部の副部長に選出されている。⁴⁸⁾

1889（明治22）年に、大日本帝国憲法が發布され、同時に貴族院令と衆議院議員選挙法が公布された。この法令では、婦人は選挙権・被選挙権を与えられなかった。この婦人参政権に対しては何故か矯風会は何らの発言もしていない。1890（明治23）年7月には、「集会政社法」に公布され、女子が政談集会の発起人になること・政談集会に参加すること・政社に加入することを禁止し、違反者には2円以上20円以下の罰金に処することとし、婦人を政治から嚴重に遮断した。また政府は帝国議会の開催に備えて「衆議院規則案」を作成し、「婦人ハ傍聴ヲ許サズ」という条文を入れた。この政談集会への参加禁止・議会の傍聴の禁止に対しては、「婦人白標倶楽部」は「集会及政社法」第四条の改正建白書を東京府庁を経て元老院に提出した。⁴⁹⁾

第一回衆議院議員総選挙に治郎が立候補し、当選し、国政に参与することとなるが、治郎の政界での活躍は長続きしなかった。1890（明治23）年に新島襄が永眠し、治郎が同志社の経営に参加することを要請されたからである。経理に明るい人として同志社の資産管理委員として山本覚馬氏から懇請され、同志社の綱領を新島襄と猪一郎蘇峰とともに起草した治郎は、同志社の財政整理に着手した。20年間にもわたる京都での生活で、同志社の磐石の基礎を経理面から築きあげたのは治郎の手腕によるものである。

湯浅も初子も基督者である。一人は新島の直弟子、初子はゼーンの直弟子、また新島の弟子でもある。二人とも外聞を気にしない。二人とも、内に内にと築き上げる流儀だ。二人とも眞實其のものだ。二人に共通の點は多分に在る。然し二人とも飽くまで強い。飽くまで譲らぬ流儀である自信の強さでは甲乙はない。唯一全然違ふ點は、湯浅は経理に明かで、徹頭徹尾豫算決算からやつて行く即ち聖められたる實業家だ。初子は子供本位で、金銭にはむしろ心が無い。決して自身の贅澤などは考へた事もないのだが、子供の養育、子供の教育と云ふ時には、豫算決算などはすぐ超越して仕舞ふのだ。湯浅がこの大家族を控へ、教育盛、嫁入前の息子娘をかゝへながら、其全精力を、一文の収入もない云はゞ道樂仕事に當つて居る時、然かもそれが廿年も續いて居ていつ果てるとも分らぬ時、如何に湯浅が經濟的に堪能な人であつても、時には持ち株の上り下りも有らう。事業が思はしく繰廻せぬ時もあらう。思はぬ支出の續く時もあらう。こんな時、頑はない澤山の子供を傍へに、如何に心を配つても、初子の手

で當てがはれた豫算が幾度となく脱線する時に、湯浅の疳癪も又無理の無い事であつたに違いない。

初子とすれば又自身何もかも捨て、この多くの子供と家とに奉仕して居るのに、僅かの金銭にそれ程やかましく云はれる道理はない筈と思つたのも又無理はない。唯財政丈けではない。湯浅が關係する程の事は、初子は内外皆預つて居た。彼女の儒教式キリスト教と、湯浅の實業家的基督教の間に、所謂武家出と商家出との間に、いづれも聖化の途中に有つていづれも自信の權化と云つた強さの二人の間に問題毎に、悉く始めから一致する事は有り得ない⁵⁰⁾。

息子の十郎は治郎が同志社の理事としてその經理を預かつていた時のことを

あの時分、父と母は、時には衝突があつたやうでした。でも、子供等の前では争はない事にしてあつたと見えて、そんな時は、きまつて洋式の應接間へ入つて、二人切りで話して居ました。父が可なり激しい言葉で物を言つて居るのが、洩れ聞こえる位で、内容は何も解りませんでしたが、子供心に、如何にも悲しい思ひが為ました⁵¹⁾。

才覚のある商家の出身の治郎、教育熱心できかぬ氣の持ち主の初子、二人が衝突しないわけではない。先妻との間の4人の子に加えて、二人の間には、三女しち、五男八郎、四女くめ、六男十郎、五女かずよ、六女なおよ(天)、七男餘三、八男餘四郎の7人の子どもがあつた。家業を次男三郎に譲っていたので、治郎の生活は資産の運用によるものであり、家計は「計入制出」に立たざるをえなかったものであり、家計のあり方をめぐって初子との衝突も大半ここから生まれていた。

治郎は1932年(昭和7)年に、初子は1934(昭和9)年に歸らぬ人となった。家業を隆盛に導き、政界にもその力量を発揮した治郎の壮年期、その最盛期に妻となり、矯風会活動にも積極的に参加し、元老院に「一夫一婦制」の建白を提出することになった初子、二人の結婚は、男女平等とは言い難いが、天理に基づて信頼しあい、「夫唱婦隨」の家庭を築いたといえよう。

熊本洋学校のもう一人の女生徒横井みや子は、同じ熊本洋学校卒業生の海老名弾正の妻となっている。彼女との結婚について海老名は次のように語っている。

我々二人(=横井時雄と海老名弾正の二人)は熊本に行き、彼處の状況を視察した。徳富蘇峰は大江義塾を興し、青年を集めて居る。大久保眞次郎は政治運動に没頭して居る。田中賢道も同じく政事運動に奔走して居る。私は彼等の政談演説會にも出席して見たが、中々の盛會であつた。前田案子君が演説の途中で行詰り、眼を白黒させて居つたが、どうしても出ない、とうとう忘れましてといつて、引き込んだ所は氣の毒であつたが、熊本人の正直さが見えて頼母しかつた。熊本には數名の信者もあり、又若干求道者も居るから、よしや下村の英語學會は廢止するとも傳道は繼續することにして、熊本を去り、二人は京都に歸つた。そして同志社に於て、又教會に於て、盛大

に傳道説教をなし、少なからず會衆をして靈感に溢れしめた。次いで大阪に行き神戸に往つて、傳道の氣勢を揚げたのである。同志社に居る者は、學校經營に没頭して居るが、地方に居る者は、皆、實戰の勇士であつた。

そこで偶々京阪神に來れば、引張颯となつて、信仰の英氣を發揚したのである。ところが横井は急いで今治に歸らねばならぬやうになつた。神戸港から乗船するので、私は彼と同伴西村屋に投じた。時は恰も夕暮で、私は同伴して室に入つた。室は旅館の二階、海に面して居た。横井は私を見てにつこり笑つていふ、見出したかい、何をさ、細君さ、中々見出さない、居らないよ、此れが二人の間答であつた。横井は嘗て或る女性を私に勧めたこともあつたが、私は辭した。處がやがて彼はおれの妹は近頃眼の方も大分快くなつて、夜分も讀書して居るやうだ。ウーンさうか、眼が悪かつたやうに聞いて居たが、それは結構だな！。妹は我々の仲間には到底六ヶ敷いかと思つたこともあつたが、このごろは、母は我々の仲間にくれるかも知れない。君どうじや。君の妹なら、人柄も大抵分つて居るし、血統も分つて居るし、英語も出来るし、もらはれるなら、欲しいねえ。家内と相談して家内から話させてみよう。それは誠によい話であるが、それなら僕は先づ友人の了解を得たいのである。君の妹を欲しい人は幾人もあつたさうだが、中にも僕の親友某は熱中して居つたさうだが、失敗に了つたことは君の知る通りだ。君が先日僕に告げたやうに、彼は既に優秀な某女子を撰定したさうだから、最早、何の遠慮はいらないけれど、僕は友情を重んずるのだ。友情をも傷けて候補者を定むることは、不本意千萬であるから、先づ彼と相談して、然る後改めて僕の方から君へ相談致さう、君の方に可能性があるかないか、君の細君を煩はして探つて戴くことは差支なからうと思ふ、宜しく御頼み申すといつて別れた。が、何だか、半分は成立したやうな心地がした。私は其の後態々遠く友人を訪問して、私の意志を明したら、彼はいふ。ウーン、さうか、さうなると、何だか、君の家には行きにくいね！恥づかしい氣がするよ。しかし君が貰つて呉れ、ば満足だ。彼女は、何だか腰骨の強い度胸の据つた女だよう。横井とは違ふよ。君が貰つて呉れ、ば満足だ。それもさうだが、まだ外にもあるよ。何某は才媛である。アレを貰つたらどうだ。某々二人のうち僕は乙を撰んだが、君は甲を撰んだらどうだと、友人は私に薦めた。有り難う、僕は矢張横井の方にしようと答へた。

その後、私は横井家の親しき係り醫ベレー教師に私の意志を陳べて、教師の意見を聞いた。教師は直に答へて、Very good ; she is mild, gentle, intelligent and beautiful. 斯く答へられたは、一もなく二もなく、決意を固むるばかりである。翌日ベレー教師は私に語つていふ、彼の女の健康は近頃良好であつて心配ないが、懷妊の時期が心配になる。懷妊さへしなければ、安心であると云つた。之は私をして多少躊躇せしめたが、最早騎虎の勢中止する譯には行かぬ。私は一ヶ月ばかりも横井にをくれて今治に

到着した。横井はいふ。家内の探知する所によれば、一寸六ヶ敷さうである。結婚の事は當分中止といつて居るさうだ。それなら、それでもよいが、君の妹は前年の事を氣にして居るかも知れない。何某は既に他の女子と婚約して居ることを知つて居るかどうか、又僕は彼に面會して了解を得て來たことは無論知らないだらうから、この二件を細君から話してもらひたい。而して改めて僕の意志を告げて貰ひたいとは、依頼したもの、私は翻つて色々彼の女の健康状態につき聞き質して見れば餘程虚弱のやうである。彼の女は人物も高貴であり、英學も相應に出來て居るから、申分はないが、身體虚弱の爲我が獻身の仕事が妨げられては神に對し又、父に對してすまない。さう思つて苦慮煩悶、食の味を失ひ、數回絶食するに至つた。一度過つては生涯取返しはつかないとつらつら考へて見れば、今まで妻を娶ることは、重に讀書して助力して貰ひたいといふ利用の立場から考察を下して居つた。が、さてさうなると、若し健康の女子と雖も婚姻後虚弱の女とならんとも豫知し難い。果して虚弱の人となつたら、その時は必ず大失望に陥るであらう。利用主義の大缺陷は見逃されない。健康も必要であり、學才も必要であるが、婚姻の根本精神は更に更に深いものでなければならない。それは、永久變らないものでなければならない。それは Love である。之れは夫婦の根本第一義である。問題は之れである。我果して眞に彼の女を愛するや。否や。如何様の境遇に出逢ふても、變らない、動かない、薄らがない愛があるや否やである。之にて凡ての解決はつくのである。こゝに夫婦の神聖なる奥義が存するのである。神の聖旨はこゝにあると衝き留めたとき、私の心は釋然たるを得たのである。恰も私の方にその決心がついたとき、横井は私に告げていふ。妹の心は動いた。母もその氣になつて居ると。私は欣然として横井の報告を聞き、彼の特別なる紹介を受け、母堂と妹君とに改めて挨拶をなした。翌日は横井家全家及び教友三名を伴ひ、乗船して近傍の島山に遊んだ。私は本望を達し、後日を期して、今治を辭し去つた。⁵²⁾

親友の横井と海老名の偶然の會話から横井の妹みや子と海老名の縁談が出て来る。男女共学に反対し、熊本洋学校時代、儒學的倫理觀の虜となっており、みや子や初子と共に学ぶことに反対していた海老名が温和で優しく、知的で美しい女性みや子に魅せられたが、医師としてのベレーの「懷妊の際には心配である」との指摘に、また結婚＝家系の存続という封建的な家制度に縛られている彼の動搖が如実に示されている。海老名が結婚＝両性の愛の表現として受け止めるためには、苦悶の日々を必要とした。病弱な妻の存在が伝道者としての桎梏となるかも知れない。だが、二人の愛はこの困難を乗り切れるよう神が導いてくれると確信した時、結婚への躊躇は消えた。みや子とて同様であつたろう。煩悶の末の結論であつたといえよう。そうしたみや子の健康状態が東京婦人矯風会の發起人に名を連れたものの、第一回の議員懇談会では退会届を提出したことがうなづける。

海老名がみや子と婚約した直後にみや子に対して次の書簡を送っている。

實に御互ひ未だ智にも徳にも不完全なる者なれば、必ず心を痛むる事折々あるべし。然し御互ひ赦し合ふも亦一つの令徳と奉存候。且つ相赦し相扶け相補ひ相全ふするに御互ひ一生の道と存候間、御互ひに眞面目を打出して⁵³⁾交り度候。

以前は世上に愛すべきものなく亦失望の果として天國を希望する様に相成り候ひしが、此頃は世上にも亦パラダイスがあるから亦愈永遠に至るべき様永遠不壊のものに氣がうつり申候。花喻の如く先づ神の國と其の義を求めば何も我等をして高尚清潔の道に進むことに至らしむ。實に神の御高慮は感謝に堪えざること、奉恭悦候。⁵⁴⁾云々一方は、夫婦相愛の道を説き、他は人生觀の変容とも考えられるものであり、みや子と結婚することが地上のパラダイスの実現と大袈裟な表現をしている。

相互扶助、相思相愛の実践が彼らの結婚生活の基点であったことはいうまでもない。

政府と民衆が日本人に共学の特権を否定に固執していたので、この仕事はすべて「女学校」でなされねばならなかった。しかし世界中の誰一人として彼女以上に、その中で無限のものの不変の法則が揺り籠から墓場まで彼らが組織されるはずであることを命じているが、人間的な生活のすべての本質的な仕事に彼らを準備する教育における両性の公正で、名誉である、そして公平な組織から生じるそうした特殊な利点と相互利益の普及力があり力強い性質を、知る者はいない。誰一人として彼女のような者以上に、分離の連続の中で自然発生的に生じる悪の本性を、またそうした政策の唯一の基礎を形成する好色な口実と疑念を、知っている者はいない。彼女の国の人々の偏見と古い政策とは、彼らに、たった今告発されたように、半ば便宜的な、男女別学の制約された手段で急に止まることへと導いた。しかし、本性と精神に対して主張され；30年も以前に最悪の逆境の下でさえよりよい制度の可能性の証拠を、彼女の性（＝女性）のために勝ち取られ；その利益と祝福の孤立しているが典型的なものをそなえているという；そうした偏見を否定する不屈の持続力のある精神は、それがアメリカでおよび伝統の成熟した、先例の統治する、偏見につきまとわれたヨーロッパでさえも勝利したように、日本でも遠からず勝利するであろう。⁵⁵⁾

ジェーンズが海老名夫妻については伝道者夫婦としていたが、湯浅夫妻については、京都の上流社会の一員と記述しており、湯浅の生活が資産運用に依りながら同志社の経営者として活躍していることは見逃されている。

何れにしても初子とみや子はキリスト者として結婚生活に入り、充実した生涯を送ったのであり、熊本洋学校での共学が、男女平等を、また夫婦の協同・相互補完・相互信頼、愛による紐帯の家族觀を基礎づけていたということではできないであろうか。婦人矯風会活動や一夫一婦制を堅持しようとすることに現れたのではなかろうか。（完）

註

- 1) Capt. L. L. Janes “Kumamoto” (同志社社史資料編集所「史料彙集第二集」p. 128)

ジェーンズは、初子の配偶者の湯浅治郎を「枢密院議員」=member of Emperor's Privy Council と記述しているが、初子との結婚当時治郎は衆議院議員であり、明らかな誤記である。京都御所の近くに住んでいたことが、あたかも治郎を旧貴族の如く認識させたのではなかろうか。治郎は本文でも述べたように安中の豪商の総領息子であり、幕末明治の大変動期に事業を拡大していった手腕の持ち主でもあった。

- 2) 久布白落實『湯浅初子』16頁
3) 久布白落實『湯浅初子』22頁
4) 久布白落實『湯浅初子』31頁
5) 久布白落實『湯浅初子』34頁
6) 久布白落實『湯浅初子』45頁～46頁
7) 久布白落實『湯浅初子』46頁
8) 「共案学舎」の成立事情は、次の「共立学舎設立ノ旨趣」に明らかである。

夫レ学ハ知識ヲ研キ芸術ヲ磨スルハ言ヲ俟タスシテ明カナリ。然リト雖モ其人能ク徳ヲ修メ行ヲ正シ其芸術用ヲ為スニアラサルヨリハ、寧ロ学ハサルノ愈レルニ若カサルナリ。本邦外交一タヒ開ケシヨリ、西学盛ニ行ハレ文明日ニ進ミ物理器械ノ術至ラサルナシト雖モ修身成徳ノ学行ハレズ、稍達識百課ノ技芸ヲ究メ其理ニ通ズルモノト雖モ、其ノ行ヒ或ハ見ルベカラザルモノアリ。是レ他ナシ、修身成徳ノ学ナケレバナリ、而モ彼ノ漢籍ニ陳腐シ其ノ用キガ如キハ論ナキノミ。今茲ニ同志数名相議シ一小学舎ヲ當ミ大ニ修身成徳ノ学ヲ講ジ以テ百課ノ学ニ及ビ、大ニ其ノオヲ成シ、其ノ用ヲ為スアラントス、多方ノ同志或ハ之ヲ賛成セバ独リ同志ノ幸ノミニアランヲヤ。国家誘学ノ際年少向学ノ道ニ於テ小補ナカラザルニ庶幾カラン。

明治十二年十二月十七日

共立学舎総代 徳富 一敬
嘉悦 氏房
宮川 房之

(花立三郎『大江義塾』21頁より孫引)

- 9) 花立三郎『大江義塾』18頁
10) 久布白落實『湯浅初子』67頁
11) 久布白落實『湯浅初子』69頁
12) 久布白落實『湯浅初子』69頁
13) 久布白落實『湯浅初子』72頁
14) 久布白落實『湯浅初子』73頁
15) 三浦綾子『われ弱ければ』96頁～97頁
16) 三浦綾子『われ弱ければ』93頁～94頁
17) 三浦綾子『われ弱ければ』107頁～108頁
18) 三浦綾子『われ弱ければ』113頁～122頁
19) 久布白落實『湯浅初子』81頁～82頁 (同旨 久布白落實編『矢嶋梶子傳』131頁)
20) 久布白落實『湯浅初子』83頁
21) 湯浅三郎編『湯浅治郎』10頁
22) 湯浅三郎編『湯浅治郎』39頁～41頁
23) 久布白落實『湯浅初子』85頁
24) 久布白落實『湯浅初子』85頁
25) 久布白落實『湯浅初子』86頁

- 26) 久布白落實『湯浅初子』87頁
- 27) 久布白落實『湯浅初子』94頁
- 28) 久布白落實『湯浅初子』99頁
- 29) 久布白落實『湯浅初子』101頁
- 30) 久布白落實『湯浅初子』132頁
- 31) 久布白落實『湯浅初子』132頁
- 32) 久布白落實『湯浅初子』133頁
- 33) 久布白落實『湯浅初子』133頁
- 34) 「万国政府への請願」の全文は次の通りである。

我等、この請願者は、体力的には弱き種族とは云え、家を愛し、国を愛し、世界国家の家族の一員としては強き精神力の持主であります。我等は明確な頭脳と、清らかな心情とが正しい生活と、幸福な家庭を造り、又国々を平和に近づけることを信じます。

我等は、アルコール、阿片其他麻薬の使用が我等の社会生活を乱し、世界を不幸にし特に我等の子供等を禍いすることを知って居ります。我等は麻薬、阿片等が正当な保護の下で売られ、政府が其利益を得るために、時に条約によって強制的に売りつけられて居ること、恥をもって認めざるを得ません。我等は世界の道德標準を高め、悪を為すことを困難にするために、法律は多くの為すべきことがあることを認めます。我等は今世界がこうした悪の下に苦悩して居る現状に対し、何をする力も有りません。然しあなた方は、この混乱の内から国々の名誉を取戻す力を持って居られます。故に我等は、各国の婦人等の協同一致の代表的声をもってあなた方の下に参ります。そして法律の基礎を高めて、之をキリスト者の道義の上に立って、各国が、アルコール飲用売ること、又阿片売買することを禁じ、此等の全面的禁止によって世界の国々又各国政府の下に在る諸々の殖民地よりこの災を取り去られんことを希うものであります。(久布白落實の訳による)

『日本キリスト教婦人矯風会百年史』26頁より孫引

- 35) 久布白落實『矢嶋楫子傳』199頁
- 36) 『女学雑誌』48号所収(『日本キリスト教婦人矯風会百年史』42頁より孫引)
- 37) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』38頁
- 38) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』27頁～28頁
- 39) 外崎光広『日本婦人論史』(上)132頁～135頁
- 40) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』65頁
- 41) 外崎光広『日本婦人論史』(上)136頁
- 42) 外崎光広『日本婦人論史』(上)136頁
- 43) 外崎光広『日本婦人論史』(上)136頁
- 44) 外崎光広『日本婦人論史』(上)137頁
- 45) 外崎光広『日本婦人論史』(上)139頁より孫引
- 46) 大久保泰甫『日本近代法の父 ポアソナアド』150頁
- 47) 大久保泰甫『日本近代法の父 ポアソナアド』160頁
- 48) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』66頁～67頁
- 49) 外崎光広『日本婦人論史』(上)201頁
- 50) 久布白落實『湯浅初子』134頁～141頁
- 51) 久布白落實『湯浅初子』139頁
- 52) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』162頁～165頁
- 53) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』166頁
- 54) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』166頁
- 55) Capt. L. L. Janes “Kumamoto”(同志社社史々料編集所「史料彙集第二集」pp128～129)

主要参考文献

- ① Capt. L. L. Janes “Kumamoto” (同志社社史資料編集所「史料彙集第二～四集」)
- ② フレッド・G. ノートヘルファー『アメリカのサムライ』
- ③ 同志社編『熊本バンド』
- ④ 福沢諭吉『学問のすすめ』
- ⑤ 徳富蘇峰『蘇峰自傳』
- ⑥ 内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』
- ⑦ 久布白落實『湯浅初子』
- ⑧ 久布白落實編『矢島楫子傳』
- ⑨ 湯浅三郎編『湯浅治郎』
- ⑩ 渡瀬常吉『海老名弾正先生』
- ⑪ 昭和女子大近代文学研究室編『近代文学研究叢書 10』
- ⑫ 徳富蘆花『竹崎順子』